

八幡とアクアリウムと彼女

myo—n

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ひよんな事から八幡と誰かがデートする話。

目次

前編	1
中編 1	7
中編 2	17

## 前編

物欲センサーを知ってるだろうか。

ソシヤゲのガチャが当たらない要因の一つと言われているアレだ。良い物を当てようと思えば思う程、目当ての物は当たらない。

逆に目当てのものじゃなく違う物がポロツと出てくる事もある。

これを世間からはすり抜け、と呼ばれている。

俺が何を言いたいかと言うと、要するに……

「おめでとうございませす!! 一等賞のアクアリウムSOBUのペアチケットです!」

思わぬ幸運というのは身に余る物だという事だ。

「という訳だからこれやるわ」

テーブルの上にチケットを置く。

「お兄ちゃん雑な説明は小町的にポイント低いよ?」

「うるせえ、とにかくこんな物俺にとったら無用の長物でしかないから受け取っとけ」

ボツチにペアチケットとか何それ何処の地獄?

「何かゴミを押し付けられてる気分になるんだけど……」

「何がゴミかなんて人それぞれの価値観によるだろ」

「うーん、それもそうだね。じゃあこれはありがたく貰いま……あ」

チケットを見つめて固まる小町。

「どうした?」

「お兄ちゃんこれペアチケットはペアチケットでも……カップル専用のだよ」

「おい嘘だろ」

本当だった。

何そのピンポイントな指定。

非リアに厳しすぎやしませんかね。

「流石にカップルに限定されちゃうと使えないなあ……」

「そうだな…。親父とお袋はどうだ？」

「2人は昨日から温泉旅行中だよ」

「え、何それ聞いてないんだけど」

もう少し報連相を密にして欲しい。

というか家事とかどうすんだよ……。いや、小町ができるか。

「流石にお兄ちゃんと行くのは恥ずかしいし小町はパス」

「いや、俺は別に構わんが」

「うわあ……」

おいやめろ、そんな目で見るとんじやない。

お兄ちゃん死にたくなっちゃうぞ。

「んんっ……。じゃあ売るか」

「このチケツト転売禁止だよ」

再びチケツトを見れば、裏面に転売禁止と書かれてあった。

ぬかりなさすぎだろ。

「oh……。なら勿体無いけど捨てるか」

「ええ〜もつたいないー。アクアリウムSOBUって今超絶人気で

中々手に入らないんだよ！」

「ぐぬぬ……」

そう言われると何か物凄い損をする気分になる。

何か策は無いものか……

ユーガツタメール

「ん？何だ……。？」

相手は……。雪ノ下か。

【件名：一緒に行つてあげなくも無いわ】

本文：

小町さんから話は聞いたわ。

目が腐っている貴方には一緒に行く異性なんて誘拐か脅迫でもしないといけないでしょう？

そこで、貴方が間違いを犯さない為に私が付き合つてあげるわ。

いい？これは部長命令よ。

「小町さーん……。っ？」

「あつ、いつけなーい♪チケットの事お父さんにメールで送ろうとしたら間違つて雪乃さん達に送っちゃったー(棒読み)」

「おいこら」

なんて爆弾を投下したんだ妹よ。

そんな事したら確実に気持ち悪い奴だと思われだろうが。

「全くお前は……。ん、待てよ、雪ノ下達……。？」

ユーガッタメール

ユーガッタメール

ユーガッタメール

ユーガッタメール

ユーガッタメール

「ピッ」

携帯がけたたましく鳴る。

非常に怖いのが恐る恐るメールボックスを開く。

【件名：やつはろー！】

本文：

ヒッキーやつはろー♪

小町ちゃんから聞いたんだけど、あのアクアリウムSOBUのチケット持つてるんだって!?

優美子も行ったことあるからその時の話聞いたんだけどね〜そんな時の話がもうとつても凄くてさ〜、あつ、もともと興味はあつたんだけどね! アクアリウムSOBUの人気ショーの話を聞いたらもう凄いきたくなつちやつてさ〜……………

「……」ピッ

由比ヶ浜からのメールは途中から脱線しまくって訳が分からなくなつたので次に移ることにした。

大方話のタネにする為に俺を利用するつもりだろう。

流石ピッチ、抜け目ないな。

「さて次は……………」

「あつ、小町も見たい〜!」

「言つとくけどお前のせいだからね?」

「あーあー、小町は何も聞こえませーん！」

白々しい妹にチョップを入れつつ、次のメールに移る。

【件名：アクアリウムSOBUの件について】

本文：

こんばんは比企谷くん、平塚静です。

風の噂ですが貴方が今人気のアクアリウムSOBUのペアチケットを持って余していると聞いたのでメッセージを送りました。

ヘタレの貴方の事でしょうから、きつと誰も誘えないのでしょうか？  
しかし安心してください、私は先生です。

生徒が困っていれば手を差し伸べるのが仕事です。

なので是非アクアリウムSOBUに行きましよう。

PS：スカートかズボンどちらが好みですか？返信待ってます。

PS：PS：あと余談ですが、比企谷君は年上でも大丈夫でしょうか？返信待ってます。

PS：PS：PS：返信待ってます

「怖い怖い怖い」

途中まで言ってることは分かったのに呪いのレターになってるぞ、おい。

え、待って後ろ振り向いたら居るとかないよね、ね？

「……よし、いないな」

「何やってんのお兄ちゃん。次行こ次」

「お、おおう」

気を取り直して次のメールを見る。

【件名：ひゃっはろ〜】

ピッ

この人のは恐ろしくて見るのをやめた。

大方からかいのメールだろう、多分。

というか何でこの人俺のメアド知ってるの。

ユーガッタメール

【件名：ちゃんと見ないとダメだよ？】

本文：——空白——

.....。

「小町……お兄ちゃんもう死ぬかもしれない」

「ドンマイ♪」

畜生、神も仏も小町もないじゃねえか。

仕方ない……見るか。

【件名：ひゃっはろ〜】

本文：

雪乃ちゃんに聞いたんだけどアクアリウムSOBUのカップルチケットを持つてるんだって〜？

お姉さん常日頃から行きたいな〜って思ってたんだよね〜。

まあ雪乃ちゃんも行ってもそれはそれでおもしろそうだけど。

とにかく返信よろしくね〜

PS：賢い君ならどっちを選べばいいかわかるよね？

「メールなのに圧が凄い……」

「お兄ちゃん強く生きてね♪」

小町がちよつとうざいので無視して次のメールを開く。

【件名：水族館】

本文：

川崎だ。

暇なら水族館いかないか？

けーちゃんがお前と一緒に遊びたいんだとさ。

「このメールは川なんとかさんのか」

今までのメールで一番短いかつ理由が分かりやすい。

「沙希さんか〜お兄ちゃんモテモテですなあ。小町はちよつと寂しい

ぞ〜?？」

「アホか。文面から見て妹の為だろ」

「はああああ……ほんとごみいちちゃんだね」

「ひでえ」

【件名：せくんぱいつ??】

本文：

こんばんは〜可愛い後輩ちゃんです（\*?、\*）



いや、この間大きな案件が終わったんで何かご褒美が欲しいんですよね（○、▽、○）。

というわけで先輩、アクアリウムSOBUに行きましよう？

優しい先輩はあ……私を選んでくれますよね？（\*、▽、\*）  
楽しみにしてますよ（???）

「あ、あざとい……」

何この見た事ない顔文字の数々。

普通の奴だったら勘違いしてる所だ。

「さて、これでメールは全てな訳だが……」

殆ど強制みたいなメールばかりだったな。

「で、お兄ちゃん誰にするの？」

「……………妥当なのは川なんとかさんと一色辺りだな。ちゃんとした理由もあるし」

雪ノ下は行っても罵声され続ける展開しか見えない。

由比ヶ浜は話が脱線しすぎて何かよく分からん。

平塚先生は……うん、頑張れ。

雪ノ下さんの………ぜつつつたい無しだ。何されるか分かったもんじゃない。

となると残るのは一色か川なんとかさんにかかる。

「とりあえずだが……」

全員に少し考えさせて欲しいと一斉メールを送った。

幸いこのチケットの有効期限はまだ先だから今すぐに決める必要はない。

「はあ……」

どうしてこうなったんだ。

## 中編―1

「お兄ちゃん朝だよ〜」

「んん……」

小町の声が聞こえる。

起きあがろうと布団を少し剥いでまた元に戻す。

「寒い……あと5分」

寒すぎて体が外に出たくないと言っている。

だからどうして布団からは逃げ出せそうもない。

仕方ないのでそのまま二度寝を決め込もうとした時、勢いよく布団が引つ剥がされた。

「も〜、朝だつて言ってるでしょ?」

「とんでもない事をしてくれましたね小町さん」

人類は寒さには勝つ為に体をあの手この手で体を温める。

だから二度寝は正当化されても何の問題もない。

よつて俺を寝させたまえ。

「むしろ献身的に起こしに来てて、小町的にポイント高めだよ?」

「はいはい、かわいいかわいい」

適当に頭を撫でておく。

やだ、今の八幡的にポイントたか〜い。

「むう、全然感情がこもってない!」

「込めたら込めたでドン引きするだろ」

「まあそうだけど」

「ほれ見ろ」

「とにかく、朝ごはんできてるから早く食べてね!」

「分かった」

顔を洗って、歯を磨く。

案外これだけでもかなり目が覚めるものだ。

あとは多少の寝癖を直しておくか……まあ誰も気にしないと思うが。

リビングに行くと小町がもう出ようとしていた。

「今日学校で用事あるから先行くね！食器は洗つといて！」  
「分かった。鍵は締めとくわ」

小町を玄関まで見送る為にマツ缶片手に着いていく。  
そういえば最近毎日飲んでるな……ちよつと控えるか。

「あつ、そうだ！」

小町が何かを思い出した。  
何だろ？嫌な予感がする。

具体的にはチから始まる物が出てくる気がする。

「チケットの事ちやんと決めないとだよ！」

「……………休んでいい？」

「駄目！じゃあ行つてきます！」

「いつてら……………」

ドアの鍵を閉める。

リビングに戻つてマツ缶の中身を一気に飲み干す。

「はあ……………行きたくねえな」

テーブルに置いてあるのはアクアリウムSOBUのカップル限定  
ペアチケツト。

偶然手に入つて持て余していたら、現雪ノ下達に情報が広がり現在  
進行形てわ選択を迫られる状況になっている。

正直誰を選んでも碌な目に遭いそうにないので捨てたい。

何でこんな物が当たるのか……物欲センサーには仕事して欲しい  
ものだ。

だから週明けの今日、物凄く、非常に、それはもう学校に行きづら  
いという訳である。

「休めるか電話かけてみるか」

『もしもしこちら総武高校の平塚です』

「……………平塚先生かよ」

なんてこつた。

これじゃあズル休みできないじゃないか。  
クソツタレな神様め。

ダメ元でやってみるか……………。

「ゴホゴホ……2年の比企谷です。今日は体調が悪『仮病だな』………  
すんませんでした」

即バレしたんだけどエスパーかこの人は。  
他の先生ならこれで休めるのに。

『全く……ズル休みは良くないぞ?』

「いや、でも出席日数足りてるんで別に1日くらい『1日くらいなんだ?』何でもないです、はい」

電話越しなのに圧が凄い。

今、受話器からゴゴゴゴゴゴって聞こえてきた。

うん、これは無理だな学校に行こう。

じゃないと命が危ない。

『ところで比企谷、アクアリウムSOBUのチケットの話なんだが』

「すみません、もう遅刻しそうなんで切りますね」

『おい、話はまだ』ピッ

「あつぶね」

今最も触れたくない話題だ。

というか、先生よ。俺なんかと行くよりもっと婚活に力入れた方がいいんじゃないでしょうか。

「さてと……行くか」

重い腰を上げて学校へと向かう。

そしていつも通り下駄箱で靴を変えていると何かが飛びついてきた。

「はちまーんー!」

そう、<sup>戸塚</sup>天使だ。

屈託のない笑顔、溢れる可愛いオーラ、そして慈悲深い優しさ。

神は彼に二物も三物も与えているに違いない。

「結婚しよう」

「えっ?」

「いや、何でもない。おはよう」

もういつその事戸塚を誘うか?

戸塚レベルなら全然隠せるだろうし。

クオレハ、ハチトツノニオイ!!?  
……やっぱりやめておこう。

何か背筋が凍った。

その後戸塚と別れて教室に入る。

まだ予鈴まで時間がある。

なので喋っている由比ヶ浜に気づかれない様に荷物だけ置いて素早く屋上へ向かう。

ふっ、我ながら完璧なステルスだ。

「ふう……疲れた」

設置されてるベンチに腰をかける。

さて、誰と行くか考えないとな。

……微妙に日差しが暖けえな。

……

「おい」

「ひゃー！」

うとうとしてる時に声をかけないでほしい、心臓に悪いから。

「予鈴、なってるよ」

声の主は川なんとかさんか。

妙に低い声だったから少しビビったぞ。

「……どうしてここにいるんだよ」

「私がおここにいちやだめなのか？」

「いや、別に駄目じゃないが……」

まあ川なんとかさんもボツチだから、あのむさ苦しい教室から抜けて予鈴まで一人で過ごしたかったのだろう。

「ならいいさ。ほら、教室に戻るよ」

川なんとかさんに腕を掴まれて立たされる。

そう言えば予鈴鳴ってるんだった、少し急いで戻らないといけな  
い。

「さんきゅ」

「ああ」

「……あの、手離してくれませんか？」

何故かそのまま腕を掴まれている。

これじゃあ物理的にも精神的にも移動しづらい。

「……………」

おい、何故そんな悩む。

俺の腕なんか掴んでても良い事ないだろ。

「早くしてくれないか」

「……分かったよ」

腕が自由になると同時に本鈴が鳴る。

何故腕を離してくれなかったのか聞きたかったが、生憎と時間がなかった為慌てて教室へと向かった。

もちろん、平塚先生にこっぴり絞られましたとき。

―昼休み―

決戦の時はやってきた。

チャイムと共に素早く支度を済ませ、ベストプレイスに向かう。

なるべく気配を消しつつ教室を出ようとしたら、誰かに肩を掴まれてしまった。

「ねえヒツキー！お昼ご飯一緒に食べよ！」

一番捕まりたくない由比ヶ浜に捕まってしまった。

出口から一番近い席だからと油断したのが駄目だったか……。

いやまだだ、俺は何としてもぼっち飯を食べるんだ。

「断る」

「ええ〜！何でなの？」

近い近い、距離感バグってますよガハマさん。

これだからビツチは困る。

まあこれで勘違いする俺ではないが。

「ほら、アレがアレでアレな用事があるから」

「良かった〜！じゃあ行こっ♪」

「話聞いてた？」

「うん、ヒツキーがアレとか言うのは暇だっけ事でしょ？」

「どうしてそうなる」

強引すぎやしませんかねガハマさん。

名探偵真つ青な推理力だよ。

だが事実、予定がないから言い返せない。

「あたしと食べるの……いや？」

ガヤガヤ

クラスメイトの視線が徐々にこちらを向いてくる。

やばい、そんなに目をウルウルさせるな。

俺が泣かしたみたいになっちゃうだろ。

「はあ……分かったよ」

「ほんと!？」

「ああほんとだよ。ほら、行くぞ」

「えっ、ちよ、ヒツキー!？」

一刻も早くこの場を離れたいが為に由比ヶ浜の腕を掴んで屋上へ連れて行く。

「ほら、着いたぞ」

あんな空間で飯なんか食えるか。

あと少しでもいたら具現化した視線に貫かれる所だったぞ。

「あの、ヒツキー……」

「何だ？」

「手……」

由比ヶ浜が下ろした視線の先には俺の手に掴まれている腕。

「……っ、すまん」

一刻も早くその場を去りたくて腕を掴んだことを忘れていた。

「あ、謝らなくてもいいよ！ヒツキーの手、暖かったし……」

それは遠回しに俺がゾンビじゃなかったとでも言っているのだろうか。

とうとう由比ヶ浜も雪ノ下並みの毒舌を覚えたのか……

……うん、それはないな。

だって、アホの子だし。

「そうか」

ベンチに腰をかける。

そして由比ヶ浜は当然のようにすぐ隣に座ってくる。

しかもぴったりと張り付く様に。

「おい、少し近くないか？」

「そ、そうかな？ほら、屋上って寒いし仕方ない事なんだよ！」  
たしかに、それは一理ある。

ズボンを履いてる俺ですら肌寒いのにスカートの由比ヶ浜が寒くないわけがない。

ただ、この距離は駄目だ。

何かの拍子で勘違いしそうになってしまう。

そして振られるまである……いや、振られるのかよ。

「なら部室に行くか。暖房ついてるし」

鍵を借りに行くのは少々面倒だが、致し方あるまい。

そして、立ち上がろうとした。

「待って！」

「うおっ!？」

服を引っ張られて椅子に降ろされた。

地味に尻を打った、痛い。

「何のつもりだ？」

「あ、いやその……寒くないからご飯食べよ？」

「それならこんなに密着する必要ないだろ」

「うっ……うっ」

おろおろされてもこっちが困るわ。

それに鼻水出てるし、ほんとに寒いのに何故我慢するんだよ。

「はあ……取り敢えずこれ巻いとけ」

ブレザーのポケットに入れていたマフラーを渡す。

由比ヶ浜は驚きながらも、マフラーを巻いた。

ついでにティッシュも手渡す。

「ほら、鼻水出てんぞ」

「あ、ありがと……」

顔を赤らめる由比ヶ浜。

やっぱりこいつも痩せ我慢してただけで寒かったんだろう。

「よし、じゃあ部室行くか」



「えっ?」

「マフラーつけても足の方が寒いだろうが」

特に由比ヶ浜のスカートは短い。

夏と冬を間違えてませんかというぐらいには。

ほんと、ギャルって凄いな。

「そうだけど……そーだけどー!」

「異議は認めん」

由比ヶ浜相手に口論で負ける気はしない。

伊達に雪ノ下の相手はしていないからな。

「ぶーぶー!」

「行かないなら置いてくからな」

これ以上は付き合ってられない。

というか寒い、超寒い。

曇ってて日差しも出てないし余計寒い。

早く校内に戻らないと凍死しそうだ。

まったく誰だよ屋上に連れてきた奴……俺だわ。

「ちよっ、ヒッキー待ってよ〜!」

ちなみに屋内に入った瞬間、マフラーは返されましたとき。

「……で、その腐り谷君が由比ヶ浜さんを強引に校内を引き連れ回したというわけね」

何だろう、合ってるのに合っていない言い方をするのをやめてもらいたい。

元々昼飯誘ってきたのは由比ヶ浜の方だし俺は無罪だ。

「……何でお前がいるんだよ」

「あら、私がいたら何か問題でも?」

「いやそういうわけじゃないが……」

どうりで奉仕部の鍵がなかったわけだ。

昼飯くらい自分のクラスで済ませろよ。

……人の事言えないけど。

「そう言えばゆきのんはお昼ご飯食べたの?」

ナイスだぞ由比ヶ浜。

出来れば昼休みいっぱいまで喋り続けてくれ。

「ええ、私は既に済ませているわ」

「そつかく。じゃあヒツキー、お昼ご飯食べよー」

隣に椅子を持ってきて弁当を広げる由比ヶ浜。

俺もそれに釣られて小町特製のお弁当を広げる。

「すごーいー！小町ちゃんほんと料理上手だよねー！」

近い近い近い。

距離感バグってますよガハマさん。

そんなに弁当が気になりますかね。

小町の愛（八幡希望）しか詰まってないぞ。

「……………」イラッ

「当たり前だろ。小町が作った物なら例えダークマターでも上手いと言える自信がある」

「ヒツキー超シスコンじゃんキモイ！」

「キモイかどうかはアレだがシスコンは勲章みたいなものだろ」

「それを本気で勲章と考えているのなら今すぐ矯正施設に行った方が小町さんと貴方の為よ」

「そうか？むしろ兄弟愛は神聖な物だと思いが」

「あら、小町さんからすればそうではない可能性の方が高いと思うのだけれど」

そんな事はない。

たまにゴミを見る目で見られたり、翌日の晩飯がオールトマトになつてたり、俺のせいで嫁にいけないとか言われるだけだ。

……………あれ、これって結構邪魔だと思われてないか？

悲しい、泣きそうになるわ。

「まあそういうのは置いといてさっさと飯食うか」

黙々と食べ始める。

うむ…………相変わらず小町の料理は美味い。

胃袋掴まれるどころか握り潰されるまでである。

今の八幡的にポイント高いな。

「……」ジーツ

「……」モグモグ

「……」ジトー

「……食べ辛いんだが」

「あら、自意識過剰にも限度があるわよ自意識谷君」

いや、ガン見しといてそれはないだろ……とは言えず、適当に返して黙って食べ進める。

「……」チラツ

「……」モグモグ

「……」チラツチラツ

「……だから、食べ辛いんだって」

「べつ、べべ別にヒツキーの事見てないし！目にゴミが入っただけだし!!」

由比ヶ浜よ、それは泣いてる時の言い訳だぞ。

全く……2人とも様子がおかしくて調子が狂う。

早く帰りたい、まだ昼休みだけど。

その後、気まずい空間で弁当を食べ終わると予鈴が鳴ったので足早に教室へと戻った。

## 中編―2

煩わしい午後の授業がチャイムにより終了する。

「さて……帰るか」

奉仕部？

そんなものは知らん、今日は帰るのが吉だ。

家で積み上げられたゲームが待っている。

部活をサボってするゲームは極上なのだよ。

「せくんぱいっ♪」

「……一色か」

また面倒なのに捕まってしまった。

「ちよつと今日ですね〜生徒会の仕事が多くってえ……先輩さえ良ければ手伝って欲しいんですよ〜（訳：手伝え）」

「え、いや……今日は家でアレでアレな用事があつてだな」

「何か言いました？」

「いえ何でもありません」

いろはす怖ええよ。

ゲームで良くある、はいしか選べない選択肢じゃねーか。

理不尽だ……。

「決まりですね！ほんと助かります〜♪」

「はいはい、あざといあざとい」

ほんと、この小悪魔は人を利用する事に長けすぎている。

「あつ、いろはちゃん！やつはろ〜♪」

「由依先輩こんにちは〜。今から先輩貰ってきますけどいいですよね？」

「うん、生徒会の仕事大変だもんね！ヒツキーでよかったら持ってたて！」

俺はペットか何かですかね。

あー……働きたくない。

家でゴロゴロしたい。

「はあ……一色を生徒会長にしたのは俺だからな。それくらいは責任

取るわ」

「えっ、もしかして責任とか言っただけに会いに来る口実をこじつけてあわよくばを狙ってるんですか。ごめんなさい重いし普通にストーカーですし先輩は先輩としか見れないので無理ですごめんなさい」

思い返せばこうして一色に突然振られるのは何回目だろう。

うん……考えたら負けなやつだな。

「いや違えから」

「ヒツキー……流石にストーカーは駄目だよ？」

「お前は話の文脈をもう一度思い出してこい」

「ひどい！ヒツキーのバカ！」

このアホの子はいつになったら賢くなるんだろう。

「ねえ先輩、そろそろ行きましようよ」

「おい、腕を引つ張るんじゃない」

散歩を嫌がる犬の気分が今ならよく分かる。

彼らも散歩という名の労働を強いられているのだ。

「でも、こうでもしないと来てくれませんよね？」

凶星だから反論できない。

今日は家に帰ってゲームしたかった……

「パツとやって早く帰るぞ。という訳で由比ヶ浜、今日は部活休むわ」

「分かった、ゆきのんに伝えとくね！」

「さんきゅー」

「お願いします。ほら先輩、行きますよ！」

「っ」

やだこの子腕組んで来たんだけど。

不覚にもドキツとしてしまった。

並の奴なら勘違いして失恋するレベルだ。

平常心平常心……

「……だから引つ張るなって。こういうのは葉山とかにやれよな」

「勘違いしないでくださいね？これは今から仕事を手伝ってくれるお礼なんですから♪」

何だろう、今物騒な言葉な見え隠れした気がするんだが。

……気のせいだよな？

「いいから早く離れろ。誰かに見られたら誤解されるだろ」

「私は誤解されてもいいんですよ……？」

「ん、何か言ったか？」

「何でもありません！先輩は隙あらばいなくなるのでこれは仕方ないんです。さ、行きましよう！」

腕に籠る力が強い……どうやら余程一色に信用されてないようだ。

そして腕は組んだまま、満面の笑みの一色に引き連れられて生徒会室へと向かう事になった。

道中に何人か見られたので死ぬほど恥ずかしかつたのは言うまでもない。

「たでーま……」

「おつかえりく。ってどしたのお兄ちゃん」

「何でもない……シャワー浴びてくるわ」

「ついでにお風呂も洗つといて〜」

「へいへい……」

まさかこんなに疲れるとは思わなかった。

思い出すだけで嫌になる書類の山。

終わったのが完全下校の1時間後とか……学生なのに社畜かよ。

もちろん、残業代は無い。

むしろ一色に馱まで送らされたまでである。

「あ……生き返る……」

風呂から上がってマツ缶を飲む。

甘さが五臓六腑に染み渡る……

「冗談は目だけにしてよね〜。はい、晩御飯」

今日のメニューはハンバーグか。

「……」モグモグ

「……どう？美味しい？」

「世界一美味しい」

「ちなみに今回、隠し味に新しい物を加えました〜！さて、何でしょう

か！」

「小町の愛情」

「ぶつぶぶ、それは既に入ってるよ！あ、今の小町的にポイント高い！」

「はいはい、高い高い」ナデナデ

「むう……お兄ちゃん適当な返事はポイント低いよ？」

「チーズとチリソースだろ？」

「せーかいつ！何で分かったの!?!」

「いつも小町の料理を食べてるからな、これくらいの隠し味くらい余裕で分かるぞ。今の八幡的にポイントたかーい」ナデナデ

「えへへ〜♪」ニパッ

うちの妹はいつからこんなに可愛くなったんだろう……デフォルトだったな。

ピリリリリリ

「お兄ちゃん携帯鳴ってるよ〜」

おかしい……俺の連絡先を知っているのは小町と両親、あと一色ぐらしいしかない。

一色は先程仕事をあらかた終わらせたから連絡してくる事はないとして……両親も電話をかけてくることはまずない。

そして小町は目の前にいる……ということは。

「間違い電話だな」

「でもこの番号、陽乃さんのだよ」

「マジか」

だから何である人俺の連絡先を知ってるの？

教えてたつもりはないのに……

とにかく……ここは出た方が吉だな。

もし出なかったら後でどうなるか分かったもんじゃない。

ピッ

「はいもしもしどなたでしょうか」

『比企谷君ひやはろ〜♪元気してる?』

「つい先程までまだ元気でした。ご飯食べてるんで後でかけ直してく

ださい」

『んー、いや♡』

うぜえ……

やっぱりこの人は苦手だ。

「はあ……で、用件は何ですか」

『やだなあ、アクアリウムSOBUの件だよ』

「そう言えばそんな事もありましたね。まあでもあれは」

『捨てるつもり……でしょ？』

「……よく分かりましたね」

やっぱりこの人は苦手だ。

『比企谷君なら普通にしそうだからね。女の勘ってやつよ』

この人の場合そんな生易しいものではないと思うんだがそれは言わないでおこう。

「別にいいじゃないですか。元々、偶然当たった物ですし、使う相手がないなら宝の持ち腐れですから」

『本当にそう思ってるの？』

雪ノ下さんの声色が変わった。

いつもの茶化すような口調から、真面目で冷たい口調へと。

「……何が言いたいんですか」

『言葉の通りだよ。私と雪乃ちゃん以外にも色んな人に誘われてるでしょ？ だけど君はその選択を避けようとしている。何で分かる？』

「……さあ、単純に行く意味がないからですかね」

『君さ、薄々気づいてるでしょ。彼女達の好意に』

「……」

『沈黙は肯定と取るよ』

「……ほんと、嫌な性格してますね」

『まあね』

思い当たる節がないと言えば嘘になる。

現に、今日は色んな奴の挙動がおかしかったしな。

ただ、単にアクアリウムSOBUに行きたいだけなんじゃないかと思う自分があるのも確かだ。



「仮にあいつらが俺に好意を抱いてるとして、俺には選ぶなんて事できませんよ」

『出来ないんじゃないかと、したくないだけでしょ』

「……そうとも言えますね。でも別にいいじゃないですか、俺は今のこの状況が気に入っているのよ」

『それは逃げの言い訳だよ。折角皆んな頑張ってるのに気持ちを踏みにじるような事はしちゃダメ』

この人は、本当に痛いところを突いてくる。

もしあいつらの気持ちを聞いたら、今のこのバランスは崩れ落ちるだろう。

だから、選びたくないんだ。

でもそれをさせては貰えないらしい。

「はあ……分かりました。今週中には結論を出します」

『今すぐじゃないんだ。予想通りのヘタレっぷりだね♪あ、やつぱりお姉さんと行きたい?』

「それはいいです」

『相変わらず比企谷君は冷たいねえ。まあいいや、用件はそれだけだから。じゃね』

ブツツ

「あの人にはいつになっても敵う気がしない……」

「何だったのお兄ちゃん?」

「聞き耳立ててたから大体分かるだろ」

「それはそうだけど、お兄ちゃんの口から聞きたいんだよ」

全くこの妹はどれだけ兄の事情に首を突っ込むのだろう……  
だが嫌な気はしない。

小町は今、俺の事を真剣に考えて言っている。

この目は、そういう目だ。

「……………例のチケットの件だよ。雪ノ下達に誘いをかけられているが、雪ノ下さんが言うには俺に好意を持っているらしい。いや……………違う……本当は、お、俺は……………」

心が、痛い。

言葉が出ない。

改めて言葉にしてしまうと、何もかもが崩れてしまう気がする。

「お兄ちゃん、ゆっくりでもいいから。小町は待つよ」

小町が優しく背中をさすってくれる。

ああ……妹に介抱されるなんて兄失格だな。

俺も、覚悟を決めないと。

深呼吸をして小町と向き合う。

「もう大丈夫、さんきゅな」

「うん」

「話の続きだが……俺はなんとなく気づいていたんだ。ただ、誰かを選んだら何もかもが壊れてしまう気がする。それなら誰も選べないのが今できうる限りの最善じゃないのかって思ってしまったな」

「……」

暫く無言状態が続くと、小町にデコピンされた。

「っ」

「お兄ちゃんはね、優しすぎるんだよ。だから今回はき、深く考えずにお兄ちゃんが一番好きな人とデートに行けばいいじゃん。別にお兄ちゃんが誰か選んだからって何も壊れたりはいし、そんなに脆い物じゃないよ……絶対」

「小町……」

「でも、もし本当にそうだったとしたら私だけはお兄ちゃんの拠り所であり続けるからね。……今の小町のポイント高い？」

「……ああ、ポイント高いぞ」ナゲナゲ

「うん……応援してるからね」

「おう……アドバイスありがとうな」

「お兄ちゃんは小町がいないとダメダメなんだから、いつでも頼つてね。じゃあ時間も時間だし、そろそろ寝るね」

時計を見ると既に22時を回っていた。

受験シーズンの時なのにこんな相談に乗ってもらって……本当に小町には頭が上がらない。

「おやすみ」

マツ缶を冷蔵庫から取り出し、1人になった空間で飲む。

「俺が、一番好きな人か……」

余計な思考を止める。

リスクリターンなんて今は考えない。

純粹に今会いたい奴を思い浮かべる。

「……やっぱ、あいつだよな」

そして、俺は携帯を開いた——